

THE KAGOSHIMA  
UNIVERSITY MUSEUM

# Newsletter

NO.4

AUGUST 2002



## 理学部物理科学科 寄贈資料

鹿児島大学理学部の改修に伴い、物理科学科より教育研究に用いられてきた測定機器、教育機材が見出され、総合研究博物館に寄贈された。その多くは、鹿児島大学の前身である第七高等学校(造士館)理科(1901～1950年)、鹿児島大学文理学部(1949年～1972年)時代に用いられたものである。

大学の限られた教育研究スペースの中で、古い機材を守り抜いてこられた方々にこの場をかりて敬意を表したい。昨年の博物館創設以後、各種の貴重な資料が学内各所から続々と見つかっている。今後紹介していく予定である。

## 理学部物理科学科の寄贈資料について

第七高等学校造士館(1946年 第七高等学校と名称変更)は、1901年3月、鶴丸城跡に開設された。そのなかのいわゆる「七高理科」が、現在の鹿児島大学理学部の前身である。1945年6月の鹿児島大空襲で理科の一部を焼失、さらに文理学部時代の1952年にも一般教養部の建物の大半が火災に遭遇、のちに郡元へのキャンパス移転もあり、その間に多くの資料が失われたと考えられる。したがって2度の火災以前の現存する資料はとくに貴重であり、谷林 衛、橋爪健郎両氏をはじめとする物理科学科教官が、これまでかろうじて保管してきた。今回、総合研究博物館の問い合わせに応じていただき、いずれも寄贈していただいた。

なかには、英国製の計算尺や精密な航海時計、第二次大戦中に製造された天球儀など、当時の教育研究の様子が伝わってくるかのような機材がある。

限られた予算で教育研究を遂行するには古い機材でも

大事に使い続けざるを得ない、という話をおある教官から聞いた。皮肉なことにその行為がこれらの資料を生きながらえさせたともいえる。

最新鋭の測定機器の多くはその中枢にマイクロコンピュータが入り、いわば「ブラックボックス」と化している。一方、20世紀前半の教育研究機器には、その構造や機構が明解で、今日においてなお、教育の場で科学の法則や測定法の理解を助ける教材となり得るものもある。

昨年の博物館創設時より、博物館には学内各部局から各種の資料に関する情報が続々と寄せられ、なかには鹿児島大学を特徴づける研究に関する貴重な資料が見つかり、今後順次紹介していく予定である。いずれにしても博物館発足をきっかけとしてそれらの資料の再発見や整理・保管が進むことになった。筆者はこの業務に携わり、博物館の存在と活動が大学にとって意義深いものであることをあらためて痛感している。



現在、当館は、ボランティア(渡辺則子さんと末岡晴奈さん)の協力を得て、科学機材について、博物館資料として整理と登録作業を進めている。引き続き教職員の方々には博物館へ学術標本・資料に関する情報をお寄せいただきたい。(内木場哲也)



第七高等学校造士館





モノグラフ出版のご案内

総合研究博物館では下記2冊を出版いたしました。No.1はアブ類のレビュー、No.2は底生有孔虫のモノグラフです。研究上必要とされる場合は、お手数ですがご連絡いただきたく思います。

The Kagoshima University Museum Monographs No.1

Review of the Genera of Leptogastrinae (Diptera, Asilidae) through the Literature  
Akira NAGATOMI, Hisashi OHISHI & Ding YANG

The Kagoshima University Museum Monographs No.2

Atlas of Holocene benthic foraminifers of Shimabara Bay, Kyushu, Southwest Japan  
Kazumi AKIMOTO, Chisato MATSUI, Akiko SHIMOKAWA & Keiko FURUKAWA

## 植物標本室オープン

鹿児島大学総合研究博物館では、植物標本を保管、利用するための植物標本室(KAG)を開設しました。植物標本は、植物の分類や分布、生態などを研究するうえで欠かすことのできない基礎的な学術資料です。鹿児島大学では、はやくも1900年代初頭、前身の鹿児島高等農林学校時代から、関係者の努力によって植物標本が収集されてきました。その活動は鹿児島大学農学部を引き継がれ、九州から南西諸島にかけての地域を中心に、国内各地や北アメリカ、東南アジア、台湾などの諸外国の標本をも含んだ貴重なコレクションへと発展しました。

2001年、合計13万点以上の腊葉標本(押し葉標本)からなるこのコレクションが、総合研究博物館に移管されました。当博物館では、これまでに集められた植物標本を整理、保管するとともに、さらに収集、活用していくことをめざしています。

植物標本室は、現在、農学部1号館1階(図書室隣)にあります。標本は箱型の容器に収納さ



れ、被子植物、裸子植物、シダ類に大きく分けて科の学名のアルファベット順に配列されています。ただし、未整理の標本も多く、その修復や整理が進められているところです。

総合研究博物館では、研究者をおもな対象に植物標本室の公開をおこなっています。利用者は、かんたんな手続きをへて、室内で標本の閲覧やスケッチなどを行うことができます。利用を希望される方は、担当者までご連絡ください。また、標本の修復を支援するボランティアを募集しています。どちらの件も、担当者：落合雪野、福永しげ子(電話/FAX 099-285-8141)まで、お気軽にお問い合わせください。(落合雪野)

## 落とし穴レプリカ

昨年の桜ヶ丘キャンパスの医学部保健学科棟建設に先立つ発掘調査の際に、約1万1000年前にあたる縄文時代草創期の動物を捕獲する「落とし穴」が確認されたことは、すでにニュースレターNo.2や昨年秋の特別展「古代からのおくりもの」などで紹介してきました。

総合研究博物館で作成し、『古代からのおくりもの』で展示した落とし穴のレプリカはその後、鹿児島市立ふるさと考古歴史館に貸し出し、常設展示の一角に加わることになりました。機会がありましたら、一度、足をお運び下さい。(橋本達也)



## 鹿児島市立ふるさと考古歴史館

J R 指宿枕崎線慈眼寺駅から徒歩15分 〒891-0144 鹿児島市下福元町3763-1 099-266-0696

## 兼務教官の追加と訂正

前号で兼務教官の紹介を掲載しましたが、その際、編集の  
手際で記載漏れと誤記がありました。お詫びとともに訂正さ  
せていただきます。

【追加】土田 理 教育学部 (観察・実験場面における児童・生  
徒のグラフ認知過程、観察・実験  
活動へ児童・生徒同士のコミュニ  
ケーションが果たす役割)  
米澤弘夫 理学部 (植物由来の酵素研究)

鈴木英治 理学部 (暖温帯から熱帯にかけての植物  
多様性の研究)  
河野元治 農学部 (鹿児島県の地質と鉱物)  
馬田英隆 農学部 (九州産キノコ類の収集と展示)  
日高正康 水産学部 (海底表層堆積物および底層流)  
【訂正】宮本句子 理学部 (陸上植物の多様性の解析)

## 学外協力研究者

- 秋元和実 熊本大学沿岸域環境科学教育研究センター助教授(底生有孔虫類を用いた地質時代の海洋環境の復元)  
石畑清武 鹿児島大学名誉教授(熱帯園芸学、熱帯果樹・植物・野菜類の導入・順化・生態・形態の研究評価とそれらの栽培及び改良に関する研究)  
浦島幸世 鹿児島大学名誉教授(地殻における元素の移動と濃集、たとえば熱水の溶存物質の移動と濃集による金属鉱床の研究)  
太田英利 琉球大学熱帯生物圏研究センター助教授 (爬虫両生類の系統・分類・生物地理・自然史・保全、特にアジア東部からオセアニア西部にかけての亜熱帯および熱帯域の島嶼における種分化・系統進化についての研究)  
金田 信 鹿児島大学名誉教授(植物に含まれるタンパク質分解酵素、特にセリン型酵素ククミシンの研究)  
税所俊郎 鹿児島大学名誉教授(海洋生物学、水族生態学、水産動物学に関する研究)  
鮫島正道 第一幼児教育短期大学助教授(動物形態学、鳥類骨格による比較形態学的研究、鹿児島県に分布する脊椎動物のフィールド調査による生態観察と分類・形態学的研究)  
下山正一 九州大学大学院理学研究院地球惑星科学部門生物圏進化学講座助手(古生物学と地質学、軟体動物化石の系統分類と群集古生態の研究、生物起源堆積物の生成・運搬・拡散過程の理論的研究、新生代の地層区分と年代測定に関する地質学的研究、化石と地層を使った九州の地殻運動累積傾向の研究)  
永富 昭 鹿児島大学名誉教授(アブ亜目(昆虫綱:ハエ目)の分類に関する研究)  
福田晴夫 (昆虫生態学、蝶類の生活史・日本蝶相の成立史、とくに南方からの移動種に関する研究)  
堀田 満 鹿児島県立短期大学長・鹿児島大学名誉教授(植物系統分類・地理学、熱帯植物学、有用・民族植物学)  
三木 靖 鹿児島国際大学短期大学部長(中世城郭史、日本荘園史、戦国史、南島史、文化財史の研究)  
山下 智 鹿児島大学名誉教授(動物生理学とくに味覚・嗅覚の神経生理学を専門とし、化学感覚の神経情報の電気生理学的解析、および昆虫、魚類、両生類にわたる比較生理学の研究)  
湯川淳一 九州大学農学部教授・九州大学総合博物館長・鹿児島大学名誉教授(タマバエ類の分類学的及び生態学的研究、昆虫と寄主植物の相互関係、地球温暖化が昆虫に及ぼす影響、インドネシア クラカタウ諸島の生態遷移に関する研究)  
行田義三 (貝類の分類学的及び生態学的研究)

## 2002年度の活動

**研究交流会** 本年度より新たに研究者間交流の場を  
提供すべく、「研究交流会」という企画をはじめました。

第1回は2002年5月17日に開催しました。はじめての  
企画でしたが、当日は大学内外から60名ほどの参加者  
があり、また質疑もさかに行われ、ひとまずは成功であ  
ったと思います。この会が今後一層盛んになるように努  
めたいと思います。

### 氷河期以降の始良カルデラ

下山 正一(九州大学大学院理学研究院)

「新島(燃島)からみた始良カルデラの水塊環境変遷」

森脇 広(鹿児島大学法文学部)

「始良カルデラ北西岸の平野における後氷期の地形  
変化と地殻変動」

**公開講座** 公開講座「大学博物館への誘い」の第2回  
目として昆虫分類学の理学部教授・山根正気氏による『**昆  
虫標本のできるまで—プロの目・プロの技—**』を6月15  
日に開催いたしました。

実習という性格上、募集は20名に限定せざるをえませ  
んでしたが、35名にのぼる申し込みがあり、抽選の上、  
多数の方にお断りをしなければならぬ結果となってし  
まいました。この反響の大きさは今後の企画に活かして  
いく必要性を感じております。

講座では学内林園での昆虫の採集から、同定・標本の  
完成まで、昆虫学のプロの目と技で詳細に指導してい  
ただきました。昆虫好きの方々からも大変好評をいただ  
けたものと思っています。(橋本)

## 徳之島伊仙町小島の始良丹沢火山灰の露頭保存について

今年の2月、徳之島伊仙町の工事現場から石灰岩ドリーネ(カルスト凹地)中に堆積した数枚の火山灰層が発見されました。これらの火山灰は、火山灰研究者の調査によって鹿児島湾奥部に位置する始良カルデラ起源の始良丹沢火山灰(AT火山灰)と、徳之島の西側に位置する硫黄島起源の火山灰層であることが分かりました。

AT火山灰は、約2万5千年前の大規模火砕流堆積物(入戸火砕流)、いわゆるシラスの噴出に伴う火山灰です。徳之島が噴出源から遠く離れていること、高温多雨の気象条件で風化浸食されやすいことを考えると、この火山灰層が徳之島伊仙町から発見されたことは、始良カルデラ形成の噴火規模、当時の気象条件等を考える上で極めて重要な露頭といえます。また、硫黄島の噴火の年代が不明でしたが、その火山灰はAT火山灰の上位に堆積していることから、少なくとも2万5千年より新しいことが分かりました。この島の噴火活動史を考える上でこの露頭は重要な情報を提供しました。

鹿児島大学総合研究博物館では、現地から切り取ってこれない貴重な露頭や地形をフィールドミュージアムとして現地保存することを模索しており、この露頭の保存を伊仙町に要望しました。

(大木公彦)



## 秋の特別展のお知らせ 2002.10.24～11.26

### 第2回 特別展「地球からのめぐみ—金—」

会場：総合教育研究棟2F プレゼンテーションホール〈入場無料〉

2002年度の特別展は、浦島幸世 鹿児島大学名誉教授が、国内外の金鉱山で調査研究を行なった際にサンプリングされた貴重な金鉱石標本を中心に展示をおこないます。

鹿児島県は金の産出量が日本一です。1981年に、北薩の菱刈町から高品位の金鉱脈が発見されて以来、多くの鉱山にかかわる研究者や技術者が鹿児島を訪れるようになりました。

今回の特別展では、日本の金鉱山、鹿児島の金鉱山にスポットをあて、これらの鉱山から産出した金鉱石の展示、金鉱脈のできたかた、金鉱石採掘の方法と歴史、金の用途などについて分かりやすく解説します。

### ●今後の予定

■10月24日(木)～11月26日(火)

特別展 「地球からのめぐみ—金—」

■12月13日(金)

研究交流会「未定」

※文系を予定

■11月16日(土)

市民講座「地球からのめぐみ—金—」

講師：浦島幸世 鹿児島大学名誉教授

■発行／2002年7月30日

■編集・発行／鹿児島大学総合研究博物館 〒890-0065 鹿児島市郡元1-21-30 TEL/FAX：099-285-8141